

## 博士学位論文要約

論文題目： 児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入

氏 名： 岸田 広平

要 約：

本博士論文では、児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する実証的研究を行った。まず、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に関する先行研究の動向が示された。次に、統制された研究場面において機能するかという有効性、および、現実の臨床場面において機能するかという有用性に関する議論がなされた。そして、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する有効性と有用性を兼ね備えた短期的介入として、「回避行動の減少」「快活動の増加」「不安の馴化」という複数の作用機序に焦点化した診断横断的介入が有益な選択肢となる可能性が示された。以上を踏まえて、本博士論文では、児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入について観察研究と介入研究の両方を実施した。

観察研究は以下の 2 つである。まず、子ども用回避行動尺度 (Children's Avoidance Behavior Scale: CABS) を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。児童 495 名を対象とした検討の結果、CABS は信頼性と妥当性を有する尺度であることが、一部の指標により支持された。さらに、児童の回避行動は不安症状と抑うつ症状に対する診断横断的な機能障害であることが示された。次に、子ども用快活動尺度 (Children's Pleasant Activity Scale: CPAS) を作成し、信頼性と妥当性の検討を行った。児童 331 名を対象とした検討の結果、CPAS は信頼性と妥当性を有する尺度であることが、一部の指標により支持された。さらに、児童の快活動は抑うつ症状に対する疾患特異的な機能障害であることが示された。

介入研究は以下の 2 つである。まず、児童青年の不安症と抑うつ障害に対する回避行動に焦点化した診断横断的介入プログラム (Avoidance Behavior-focused Transdiagnostic Intervention Program: ATP) を開発し、Proof of concept (POC) 試験を用いて実施可能性と有効性の検討を行った。不安症や抑うつ障害を有する児童青年 8 名に対する POC 試験の結果、介入前後の脱落率が 0%であり、実施可能性の高さが示された。有効性の検討の結果、主要効果指標である臨床家評定の診断面接における主診断の重症度や診断の数が改善することが示され、副次効果指標である自己評定の不安症状が改善することが示された。加えて、不安の馴化の指標として、診断横断的介入における自覚的障害尺度 (Subjective Units of Distress: SUD) の利用可能性を検討した結果、主診断に関係なく、すべての児童青年において SUD の報告が可能であり、診断横断的介入における SUD の利用可能性が確認された。次に、待機群と独立評定者を設定したパイロットランダム化比較試験を用いて、児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入プログラムである ATP の有効性と作用機序の検討を行った。不安症や抑うつ障害を有する児童 16 名に対するパイロットランダ

ム化比較試験の結果、有効性については、複数の評価者（臨床家、親、子ども）と多面的な領域（診断、症状、全般困難、プロセス）における査定を用いて検討した。有効性の検討の結果、ATP 実施後において、主要効果指標である診断面接による診断の数の改善が示され、副次効果指標である自己評定と親評定の抑うつ症状の改善が示された。次に、作用機序については、子ども用回避行動尺度、子ども用快活動尺度、不安の馴化を測定するための自覚的障害尺度を用いて検討した。その結果、自覚的障害度は不安症状に対する疾患特異的な媒介変数となることが再現された。一方、回避行動や快活動は、不安症状や抑うつ症状に対する診断横断的または疾患特異的な媒介変数としては示されなかった。加えて、想定した作用機序ではないものの、快活動が診断に対する媒介変数となる可能性が示された。

本論文では、有効性と有用性を兼ね備えた短期的介入として、本邦初の児童の不安症と抑うつ障害に対する診断横断的介入に対するランダム化比較試験を実施した。児童青年の不安症や抑うつ障害に対する実証的研究が非常に少ない本邦の現状を踏まえると、本論文で実施した実証的研究は、研究的にも臨床的にも大きな意義がある。将来的には、本論文を足掛かりに、不安症や抑うつ障害を有する児童青年やそれに伴う心理社会的問題を抱える児童青年にとって、有効性と有用性を兼ね備えた有益な支援が社会に普及し、実装されていくことが期待される。